

夭折した富永

中原中也

青空文庫

ほつそりと、だが骨組はしつかりしてゐた、その軀幹の上に、小さな頭が載つかつてゐた。赤いちぢ攣れた髪の毛が額に迫り、その下で紅と栗との軟い顔がほつとり上気してゐる。黒く澄んだ、黄っげ楊の葉の目が、やさしく、ただしシニカルでありたさうに折々見上げる。

彼は今日、重鬱テールなのだ。卓テーブル子に肘を突いたまゝ、ゆつくり煙を揚げてゐる。もつと尤も喫つてゐるものだけはうまさうだが。戸外は——地面は半ば乾いてあつたかい、空を風は、目標ありげにとぶ、梅雨期の或る一日だ。

そして今彼に対面する者は、彼をただ友人とのみ考へるなら、

余りに肉親的な彼の溫柔性に辟易へきえきしなければならぬ破目になるだらう。さしづめ、彼は教養ある「姉さん」なのだが、しかしそれにしては、ほんの少しながら物質観味の混つた、自我がのぞくのが邪魔になる。

友人の目にも、俗人の目にも、ともに大人しい人といふ印象を与へて、富永は逝つた。そしてそれが、全てを語るやうだ。

人が、真率にして齡を重ねる時、「習慣」の存在に対して次第に寛容になることは、自然なことである。そしてそれは、それまではよろしい。けれどもやがて彼がその寛容を手段の如く把持するに至つて、彼は墮落である。だが、寛容であることは自説的で

あるよりも遙かに易しい。良心は遅かれ早かれ、磨滅する性質のものだ。それから、人々によつて真面目な手記と見做されてゐるものはすべて、これら寛容な人達、殊には老人の手によつて遺された。

真率にして富永は齡を重ねていった。寛容を識つた。ところで代は甚だしいヂヤナリズムでいつぱいだつた。彼は、自我崇拜主義者（となつた）であつた。智的享樂性に乏しくされた。ユーモアを虐待することと、人格者であるといふことと、平和と苟安こうあんとは同義で通用する日本の、そして帝都は彼の育つた雰囲気であつた。かかる時自我崇拜主義は微笑んだ――。

ボオドレエルは「自我崇拜閣下」と綽名あだなされた。けれども一方、

会衆の前に飄然^{へうぜん}として出て来て、「君、赤ン坊の脳髓を食つた
ことがありますか」などといつてゐる。そしてかうした例は彼に
ついて多い。然らばボオドレエルは——ボオドレエルのは、彼が
彼自身の部屋に於ける、天才的狂爛の、それが對他するに際して、
即ち狂爛が諦念の形式にまで置換されるに際して、その瞬間線上
に於ける「自我崇拜閣下^{バリユメル}」であつたのだと、君が若しボオドレエ
ルを好きなら考へなければなるまい。さうしてサムボリスムなる
名称のきまるまで、その一派は「デカダン派」を以て自称してゐ
ることを思い合せて貰はう。

富永は、彼が希望したやうに、サムボリストとして詩を書いて

死んだ。

彼に就いて語りたい、実に沢山なことをさし措おいて、私はもう筆を擱おくのだが、大變贅沢をいつても好いなら、富永にはもつと、相像を促す良心、実生活への愛があつてもよかつたと思ふ。だが、そんなことは余計なことであらう。彼の詩が、智慧といふ倦鳥を慰めて呉れるにはあまりにいいものがある。

そしてこれが、夭折した富永である。誰の目にも大人しい人として映つた。富永がいまさらのやうに憶ひ出される。

(「山繭」一九二六年十一月号)

青空文庫情報

底本：「富永太郎詩集」

1975（昭和50）年7月10日初版発行

2000（平成12）年6月1日第7刷

初出：「山繭」

1926（大正15）年11月号

入力：高柳典子

校正：川山隆

2008年4月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夭折した富永

中原中也

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>